

## 期待への行動結果に対する親の反応についての 予期尺度作成の試み

渡 部 雪 子 (立正大学心理学部)

### Attempt to Explore New Scale: Japanese Junior High School Student's Perception of Parental Reaction at Expected Behavior (PPES)

Yukiko WATABE (*Faculty of Psychology, Rissho University*)

#### Abstract

The purpose of the present study was to develop new scale measuring Japanese junior high school student's perception of parental reaction at expected behavior (PPES). It is clarified that this scale has adequate reliability and validity. A result of factor analysis 2 factor was extracted. Factor 1 was named "perception of supportive reaction", also second factor was named "perception of disappointment". Girl students felt more strong "perception of supportive reaction" than boy students.

**Key words** : parental expectation, junior high school students

キーワード：親の期待、中学生

#### 問題と目的

近年、少子化が進み、青年期における親子関係は変化してきている。尾木 (1996) が指摘するように親が子どもを自分と同一化し、子どもは一身に期待を背負わなければならないという状況がある一方で、子どものしつけや教育に関して無関心で全く期待をしないという親も増加している (東京都報道発表資料, 2003)。こうした親の変化は子どもにどのような影響をもたらしているのだろうか。

臨床場面においては、親の期待を苦にする子どもの存在が指摘され (高山, 2008)、親の期待が引き金となったとされる少年犯罪なども報道されている (家庭裁判所調査官研修所, 2001)。このよう中で、親の期待が子どもの行動にどのような影響を与えているかについて明らかにする意義は大きいと考えられる。

Simons-Morton (2004) は、喫煙行動の開始と“親の期待行動に対する反応予期”(喫煙行動をした際に親がどのような反応を示すと子どもが認知しているか)について検討している。子どもが期待に背いた際に親のネガティブな反応を予期することは喫煙行動に対して負の相関を持つことを明らかにした。また、Madon, Spoth, Cross & Hilbert (2003) は親の期待が飲酒行動を抑制することを明らかにし、親の期待が子どもを不適切な行動から守る最も重要な養育行動であるということを示唆している。Simons-Morton (2004) の“親

の期待行動に対する反応予期”は全6項目で(①あなたの両親はあなたがタバコを吸っているのを見つけたらどのくらい怒ると思いますか?)などから構成されている。親の期待に反した場合に親のネガティブな反応を予期することは、期待が深く伝わっているということであり、不適応行動を抑制するとされている。

子どもの行動との関連を検討する上で、期待行動に対する親の反応についての子どもの認知に着目することは重要であると考えられる。しかし、親の反応にはネガティブな反応だけでなく、多様な反応があると考えられ、ポジティブな反応を予期することの影響も含めて検討していく必要があると考えられる。Simons-Morton, (2004) が用いた反応予期の項目には、親のポジティブな反応が含まれていないという問題点があるため、親のポジティブな反応の予期を含めて測定することのできる尺度を作成する必要があると考えられる。

そこで本研究では、期待された行動を遂行した場合、遂行しなかった場合に親がどのような反応を示すかについて測定する中学生の親の期待行動に対する反応予期尺度(以下:親の反応予期尺度と略)の開発を目指す。

本研究は、予備調査によって項目収集を行い、さらに予備調査で収集した尺度項目案を基に、親の反応予期尺度作成し、その信頼性・妥当性を検討することを目的とする。

また、作成した親の反応予期尺度得点の学年・性差について検討を行う。親の反応予期の学年差について

検討する目的としては、一般的に学年が上がるにつれて受験といったライフイベントを迎えるため親の心配や落胆といった反応が多く表出されるようになり、子どもに認知されやすくなるのではないかと考えられたためである。また、反応予期に影響をもたらしている要因を検討していく上でも性別の違いが親の反応予期に違いに関連するののかについてあらかじめ検討しておく必要があると考えられたため、性差の検討を行うこととした。

## 予備調査

### 目 的

親の期待に対する認知・感情について大学生を対象に自由記述を収集し、尺度の項目プールを作成する。

### 調査対象者

茨城県内の国立大学1校の大学生66名（男子25名、女子41名）

### 調査時期

2007年1月～3月の間に実施した。

### 調査内容

子どもの期待行動に対する親の反応という複雑な概念への筆記能力を考慮して大学生を対象に自由記述調査を行った。「親の期待に応えた場合、応えられなかった場合にあなたの親はどんな反応をしますか？親の反応について具体的に書いてください」という設問を用いた。また期待に応えられた時・応えられなかった時に親がどう感じると思うかについて自由記述で回答を求めた。

### 結 果

自由記述の総記述数は83,そのうち複数の異なった内容がみられた22項目について分離を行ったため、総記述数は105であった。筆者を除く臨床心理学・発達臨床心理学を専攻する大学院生4名でKJ法に基づく項目の分類を行った。作成された26の小カテゴリーをそれぞれ意味的に近いと思われるものを近くに配置し、中カテゴリーの空間配置図を作成した。さらに中カテゴリーから意味的に近いと思われるものを近くに配置し、大カテゴリーの空間配置図を作成した。中カテゴリーは、ポジティブな感情表出、誇らしい、評価的フィードバック、ポジティブフィードバック、安心感表出、期待の上昇、継続的期待、無反応、当たり前、心配、焦燥感、落胆、悲しみ、叱責という14カテゴリーから構成されている。最終的に大カテゴリーにおいては、

3つのカテゴリー、ポジティブ反応、ニュートラル反応、ネガティブ反応が得られた。

## 考 察

本研究では、中学生の期待への行動結果に対する親の反応についての子どもの予期を測定する尺度の項目案を作成することを目的として、大学生を対象に自由記述調査を行い、自由記述をKJ法によって分類した。

その結果、親の期待に対してポジティブ反応は40%に上り、ネガティブ反応は29%であった。ニュートラル反応は31%見られた。最終的に得られた大カテゴリーから、親が自分の行動に対してポジティブな反応を示すと感じている場合と、ネガティブな反応が返ってくることを予期している場合と、ニュートラルな反応を予期している場合があることが明らかになった。最終的に大カテゴリーで得られた結果は、Simons-Morton (2004) が取り上げていたネガティブな親の感情表出の予期だけでなく、ポジティブな親の反応への予期を含む複数の親の反応を網羅している。本研究のKJ法を用いて分類した最終カテゴリーは想定しうる親の感情表出や反応を3つの次元から捉えた妥当な分類であると考えられる。したがって、26個の小カテゴリーを全て尺度項目とし、特に自由記述の内容から重要であると思われる6つ（親は自分に期待しなくなる、鼻が高い、気にしていない風を装う、それでもいいと感じる、慰めてくれる、フォローしてくれる）の記述を補充して期待への行動結果に対する親の反応についての子どもの予期尺度（以下親の反応予期尺度と略す）原案33項目の尺度項目を作成した。これらの項目案を尺度の項目プールとして参考にし、尺度作成を行う。

## 本調査

### 目 的

予備調査で作成した尺度の因子構造を明らかにすることを目的とする。さらに、信頼性を検討し、構成概念妥当性の検討を行う。構成概念妥当性を検討するために、心理的分離尺度短縮版、ソーシャルサポート測定尺度、TK式親子関係検査の期待尺度との関連を検討する。

### 方 法

個別記入方式の質問紙を用いて無記名式で回答を求めた。調査は各学校の学校長に依頼し、学級ごとに集団で実施した。

### 調査対象者

関東地方の公立中学校3校の計367名の調査対象者の

うち性別や学年に記入漏れがなかった、1年生139名(男子62名、女子77名)、2年生81名(男子43名、女子38名)、3年生139名(男子57名、女子82名)の計359名(男子162名、女子197名)であった。

#### 調査時期

2008年7月に実施した。

#### 調査内容

##### 1. 自分に強く影響を与えていると思う養育者

自分に強く影響を与えていると思う養育者を「お父さん」、「お母さん」、「その他」の中から選択する。

##### 2. 期待されていると感じる領域

最も期待されていると思う領域について「友人関係に関すること」、「勉強や進路に関すること」、「社会のルールを守ること」、「社会の役に立つこと」、「人間的に成長すること」、「社会的に成功すること」、「スポーツに関係すること」、「自立すること」の8つの領域から1領域を選択する。

##### 3. 期待への行動結果に対する親の反応についての子どもの予期項目

予備調査に基づいて分類された項目を用いた。1で選択した人からの期待を想定して回答する。また、「期待」領域については2で選択した領域を想定して回答を求めた。全部33項目の質問に対して「はい(4点)」、「どちらかといえばはい(3点)」、「どちらかといえばいいえ(2点)」、「いいえ(1点)」のいずれかを選択する4件法であった。

##### 4. 心理的分離尺度(PSS)短縮版

青年の親からの心理的な分離の程度を測定するために、上地(2000)が作成した心理的分離尺度の短縮版の質問紙を用いた。この尺度は、青年の親からの心理的な分離の程度を測定するために、上地ら(1987)が作成した日本語版心理的分離尺度(PSI)の短縮版である、心理的分離尺度の短縮版の質問紙を用いた(上地、2000)。「親への機能的依存」(5項目)、「親の承認・支持への不満」(5項目)を用いた。回答の方法は、それぞれの質問に対して「めったにない(1点)」、「ときたまある(2点)」、「たびたびある(3点)」、「いつもそうだ(4点)」のいずれかを選択する4件法であった。5つの下位尺度それぞれにおいて各項目の合計得点を算出し、それを尺度得点とした。

##### 5. ソーシャルサポート尺度

青年のさまざまなサポート源に対していざい知覚されたソーシャルサポートを測定するために、三浦(2002)が作成した中学生用ソーシャルサポート測定尺度(5項目)を用いた。回答の方法は、そ

れぞれの質問に対して「ぜったいにちがう(1点)」、「たぶんちがう(2点)」、「たぶんそうだ(3点)」、「きっとそうだ(4点)」のいずれかを選択する4件法であった。各項目の合計得点を算出し、それを尺度得点とした。得点が高いほど知覚しているソーシャルサポートが高いことを示す。

##### 6. TK式親子関係検査のうちの「期待」下位尺度

親子関係を測定するために、品川(1972)が作成したTK式親子関係検査のうちの「期待」下位尺度(8項目)を用いた。「期待」下位尺度では、青年が捉えた親の子どもに対する高い期待や子どもの能力や気持ちにかまわず親の希望する方向に引っ張っていく態度を測定している。回答の方法は、それぞれの質問に対して「全然あてはまらない(1点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「だいたいあてはまる(3点)」、「ぴったりあてはまる(4点)」のいずれかを選択する4件法であった。各項目の合計得点を算出し、それを尺度得点とした。得点が高いほど親が自分に期待していると感じていることを示す。

#### 結果

親の反応予期尺度の下位構造を検討するために全33項目に対して、因子分析を行った。主因子法により因子を抽出した結果、固有値1以上を基準に5因子を抽出した。第5因子に属する項目が1項目しかなく、因子とはみなせなかったため、再度4因子構造を仮定し再度因子分析(最尤法、Promax回転)を行った。二重負荷を示した4項目(No.11, 16, 27, 31)を除いて残された23項目に対して因子分析(最尤法、Promax回転)を行った。さらに、因子負荷量の低かった1項目(No.9)および二重負荷を示した1項目(No.2)を除いて残された21項目に対して因子分析(最尤法、Promax回転)を行ったところ第4因子に属する項目が2項目しかなく、因子とはみなせなかったため3因子構造を仮定し因子分析(最尤法、Promax回転)を行った。第3因子に属する項目が2項目しかなく、2重負荷を示した2項目(No.7, 15)を除いて、2因子構造を仮定し残された17項目に対して因子分析(最尤法、Promax回転)を行った。結果はTable 1に示す。

第1因子に負荷量の高い項目は「自分が期待に応えられなかった場合、親は慰めてくれると思う」、「自分が期待に応えられなかった場合、親はフォローしてくれると思う」、「自分が期待に応えられなかった場合、親は励ましてくれると思う」、「自分が期待に応えられなかった場合、親は次に頑張れば良いと思ってくれると思う」、などの8項目であり、親の肯定的な反応を表していることから、「サポート反応予期」因子と命名した。

Table 1 期待への行動結果に対する親の反応についての子どもの予期尺度

因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転)

項 目 内 容	因子 1	因子 2	共通性
<b>F 1 サポート反応予期 (8 項目, <math>\alpha = .88</math>)</b>			
自分が期待に応えられなかった場合、親は慰めてくれると思う	.86	-.06	.74
自分が期待に応えられなかった場合、親はフォローしてくれると思う	.84	-.02	.70
自分が期待に応えられなかった場合、親は励ましてくれると思う	.83	-.12	.69
自分が期待に応えられなかった場合、親は次に頑張ればいいと思ってくれると思う	.73	-.16	.54
自分が期待に応えたと、親は応援していて良かったと感じると思う	.69	.14	.51
自分が期待に応えられなかった場合、親は一緒に落ち込んでくれると思う	.65	.12	.45
自分が期待に応えたと、親は褒めてくれると思う	.63	.13	.43
自分が期待に応えたと、親は誇らしく感じると思う	.36	.25	.21
<b>F 2 落胆の反応予期 (9 項目, <math>\alpha = .86</math>)</b>			
自分が期待に応えられなかった場合、親は悲しむと思う	-.06	.78	.61
自分が期待に応えられなかった場合、親はがっかりすると思う	-.17	.76	.58
自分が期待に応えられなかった場合、親は悩むと思う	-.04	.76	.57
自分が期待に応えられなかった場合、親は焦りを感じると思う	-.12	.71	.50
自分が期待に応えられなかった場合、親は残念がると思う	.08	.68	.48
自分が期待に応えられなかった場合、親は心配すると思う	.23	.61	.45
自分が期待に応えられなかった場合、親は悔しがると思う	.14	.58	.37
自分が期待に応えたと、親は鼻が高いと思う	.16	.40	.20
自分が期待に応えたと、親は周りの人への優越感を感じると思う	.02	.39	.16
因子間相関			
	因子 1	因子 2	
		-.09	
	因子 2		
		-.09	

第2因子に負荷量の高い項目は「自分が期待に応えられなかった場合、親は悲しむと思う」、「自分が期待に応えられなかった場合、親はがっかりすると思う」、「自分が期待に応えられなかった場合、親は悩むと思う」、「自分が期待に応えられなかった場合、親は焦りを感じると思う」などの9項目であり、親の落胆・狼狽および周囲への自慢といった反応を表していることから、「落胆の反応予期」因子と命名した。因子を構成する項目の平均値を算出し、それを下位尺度得点とした。

#### 信頼性の検討

Table 1 に示された各因子の項目で下位尺度を構成した。内的-一貫性の指標である Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した結果、「サポート反応予期」下位尺度では .88 「落胆の反応予期」下位尺度では .86 であった。したがって、各下位尺度において一定以上の内的-一貫性が確認された。

#### 併存的妥当性の検討

妥当性の検証において、親の反応予期尺度と他尺度との予測される関連を以下に述べる。親への機能的な依存が強い場合、実際に多くのサポートを受けている可能性がある。親のネガティブな反応を多く予期する場合には親に対して気遣いが強く、親からの承認が少ないと予測される。そこで、心理的分離尺度 (上地、2000) のうち、「親への機能的依存」、「親の承認・支持への不満」、「ソーシャルサポート尺度、親の反応予期は実際の親子関係に基づいていると予測されるため、TK 式親子関係検査の「養育期待」との関連を検討する。親の肯定的な反応は期待行動の結果の如何に関わらず、親からサポートが受けられるという認知であるため、親に依存している状態であり、サポートに対する不満は小さいと考えられる。したがって、「親への機能的依存」とは正の相関を示し、「親の承認・支持への不満」は負の関連を示すことが予測される。ソーシャルサポートと親からの肯定的な反応を予期することは期待行動を受けてのサポートという限定性はあるが、ソーシャ



ルサポートと類似性の高い概念であると考えられるため、ソーシャルサポートとは正の相関が予想される。一方、親からのネガティブな反応を予想することは自分に対する不満や非受容感として捉えられる可能性がある。したがって、「親の承認・支持への不満」とは正の相関があり、TK 式親子関係検査とは正の相関があると予測される。

併存的妥当性を検討するために親の反応予期尺度と関連が予想される他尺度との相関を検討した。結果を Table 2 に示す。「サポート反応予期」下位尺度は、心理的分離尺度「親への機能的依存」との間に .37 ( $p<.01$ )、ソーシャルサポート尺度との間に .52 ( $p<.01$ )、TK 式親子関係検査「期待」下位尺度との間に -.43 ( $p<.01$ ) の値が得られた。「落胆的反応予期」下位尺度は、心理的分離尺度「親の承認・支持への不満」下位尺度との

間に .29 ( $p<.01$ )、TK 式親子関係検査「期待」下位尺度との間に .39 ( $p<.01$ ) の値が得られた。したがって、関連が予想される尺度との間におおむね予測どおりの相関が得られたことから、反応予期尺度の一定の併存的妥当性が確認された。

#### 反応予期尺度における学年差・性差

下位尺度得点について学年差と性差の検討を行うために、学年×性の 2 要因の分散分析を行った (Table 3)。その結果、「サポート反応予期」下位尺度においては、性の主効果のみ有意であった ( $F_{(1,324)} = 11.8, p<.001$ )。女子のほうが男子よりも得点が高いことが示された。「落胆的反応予期」下位尺度においても性の主効果のみ有意であった ( $F_{(1,324)} = 4.12, p<.05$ )。男子の方が女子よりも得点が高いことが明らかになった。「サ

Table 2 親の反応予期下位尺度と関連尺度との相関係数

	機能的依存	承認・指示への不満	ソーシャルサポート	TK 式 養育期待
サポート反応予期	.37 ***	-.06	.52 ***	-.43 ***
落胆的反応予期	-.04	.29 ***	-.07	.39 ***

\*\*\* $p<.001$

Table 3 親の反応予期尺度下位尺度得点の平均値・SD と分散分析結果

	中学 1 年		中学 2 年		中学 3 年		分散分析 (F 値)		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	学年差	性差	交互作用
N	55	69	38	38	53	77			
サポート反応予期	2.58 (0.62)	2.83 (0.73)	2.58 (0.69)	2.93 (0.77)	2.67 (0.74)	2.87 (0.59)	0.29	11.83 ***	0.28
落胆的反応予期	2.26 (0.61)	2.18 (0.60)	2.34 (0.71)	2.06 (0.66)	2.40 (0.63)	2.33 (0.63)	2.28	4.12 *	0.28

( ) 内は SD.

\* $p<.05$ . \*\*\* $p<.001$

Table 4 親の反応予期尺度調査対象者の選択した影響力の強い養育者

		影響力の強い養育者		合 計
		父	母	
男 子	度数	45	76	121
	%	37.2	62.8	
	調整済み残差	5.71	-5.71	
女 子	度数	15	148	163
	%	9.2	90.8	
	調整済み残差	-5.71	5.71	
合 計	度数	60	224	284
	%	21.1	78.9	

$\chi^2_{(1)} = 32.65$ , \*\*\* $p<.001$

ポート反応予期」、「落胆の反応予期」両下位尺度においては学年の主効果および学年×性別の交互作用は有意でなかった。

### 影響力の強い養育者

調査対象者の性別によって影響を受けている親に選択する人に違いが見られるかを検討するため、カイ2乗検定を行った。親の反応予期尺度の調査対象者が選択した影響を受けていると思う親についての割合をTable 4に示す。

男子が父親から影響を受けていると選択する生徒が女子に比べて多く37.2%にのぼり、母親を選択した人は62.8%に留まった。一方女子は、母親を選択する人が圧倒的に多く、90.2%であった。女子が父親から影響を受けているとする生徒は9.2%に留まった。

### 考 察

本研究の目的は、反応予期尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することであった。

因子分析の結果、反応予期尺度はサポート反応予期因子、落胆の反応予期因子という2つの因子が得られた。この2因子は、項目収集のKJ法最終カテゴリーで想定した3つの因子ネガティブ反応、ニュートラルな反応、ポジティブな反応のうちニュートラルな反応を除いて、対応する因子が見出されたと考えられる。落胆の反応予期はSimons-Morton (2004) が用いている「親は怒る」という反応に加えて様々な親のネガティブな感情を伴った反応が含まれている。また、先行研究では、見出されていなかった親のポジティブな反応から構成されているのが、サポート反応予期である。ポジティブな反応についても測定可能な尺度が作成され、本研究の目的である親の反応についてのポジティブな反応を含んだ尺度を作成するという目的が達成された。

それぞれの因子と機能的依存、承認・支持への不満、ソーシャルサポート、養育期待との相関を検討した結果、サポート反応予期は機能的依存やソーシャルサポートと正の相関、ネガティブな期待概念を用いて測定している養育期待とは負の相関があるという予測と一致する結果が得られ、予測と一致した併存的妥当性が示されたと言えよう。また、落胆の反応予期については、承認・支持への不満と正の相関が見られ、TK式親子関係検査の養育期待とは正の相関が示され、予測と一致した関連が見られた。以上のことから、妥当性に関する予測は概ね支持され、反応予期尺度を「サポート反応予期」という子どもの感情に寄り添う感情共有的な反応と「落胆の反応予期」という親自身のネガティブな感情の表出という2つの側面から測定することは

妥当であると考えられるため、親の反応予期尺度の妥当性が確認されたと言える。

信頼性においては、 $\alpha$ 係数の値から各下位尺度において.80以上の概ね十分な内的整合性が確認された。したがって、作成した期待の受け止め方尺度に一定の併存的妥当性と信頼性が確認されたといえよう。

さらに、親の反応予期尺度の学年差と性差を検討した。その結果、「落胆の反応予期」下位尺度において、学年による違いは見られなかった。学年による変化が見られなかったことから、発達の要素よりも個人内要因が影響する可能性が示唆された。性差について検討を行ったところ、2つの下位尺度ともに性別による差が示された。女子のほうが期待に応えられなかった場合や応えた場合にサポート的な反応が親から得られると認知していることが明らかになった。一方、男子は期待に応えられなかった場合に親が落胆するという落胆反応予期を女子よりも高く抱いていることが示された。男子は女子ほど心理的に親と密着しておらず、女子よりも早く精神的な自立を求められる傾向が強いと考えられる。男子は失敗した時などに親に甘えにくく、親からのサポートを引き出しにくいのではないかと考えられる。これに対し、女子は、母子密着が強く(上地・上地, 2004)、失敗や、うまくいかないときにも機能面および、情緒面で親に依存しやすいのではないかと考えられる。実際多くの女子生徒が母親を選択していることから、母親からのサポートを得られると感じていると言える。この結果は、女子における母娘の情緒的結びつきの強さ(小野寺, 1993)を支持していると考えられる。一方、男子においては同性の父親に影響を受けている人を選択している生徒の割合が女子よりも多かった。父親から影響を受けていると感じている男子が一定数存在するが、実際の父との接触時間が少ないという現状があり(国立女性教育会館, 2005; 杉山, 1995)、父親から実質的なサポートはあまり得られないと感じている可能性がある。こうした親子の性別の組み合わせによる特徴や接触時間の違いによって男子がサポートを低く認知し、落胆を高く認知していることにつながったのではないかと解釈される。

### 本研究の限界と今後の課題

本研究は親の反応予期尺度の作成に留まっており、反応予期が内的適応や外的適応とどのように関連するのかについて今後詳細に明らかにしていく必要があると考えられる。

### 引用文献

上地玲子 (2000). 青年期後期における親からの心理的分離を測定する尺度の作成と妥当性の検討 学生相

- 談学研究, **21**, 1-15.
- 上地雄一郎・上地玲子 (2004). ホフマンの心理的分離質問票の妥当性の検討 甲南女子大学研究紀要 人間科学編, **40**, 19-25.
- 国立女性教育会館 (2005). 平成16年度・17年度家庭教育に関する国際比較調査報告書
- Madon, S., Gyll, M., Spoth, R. L., Cross, S. E., & Hilbert, S. J. (2003). The Self-fulfilling influence of mother expectations on children's underage drinking. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 1188-1205.
- 三浦正江 (2002). 中学生の日常生活における心理的ストレスに関する研究 風間書房
- 尾木直樹 (1996). 親の過剰期待と子どもの空転する努力 児童心理, **50**, 75-80.
- 小野寺敦子 (1993). 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, **64**, 147-152.
- Simons-Morton, B. G. (2004). The protective effect of parental expectations against early adolescent smoking initiation. *Health Education Research*, **19**, 561-569.
- 品川不二郎 (1972). TK 式診断的新親子関係検査手引, 田研出版
- 杉山明子 (1995). 父親不在の日本の家庭—家庭教育に関する国際比較調査から (子どもと過ごす時間—父親を中心に〈特集〉) 教育と情報, **445**, 20-25.
- 高山敬子 (2008). 学校と家庭で態度の違う子 児童心理, **62**, 59-63.
- 東京都報道発表資料, 2003年6月掲載